

第148回 三方限古典塾（'19, 2, 21）

「南洲翁手抄言志録」（その7）

26 心の官は則ち思うなり。思うの字は只だ是れ工夫の字のみ。思えば則ち愈すはわ いよいよ清明に、愈いよいよとくじつ篤実なり。其の篤実なるよりして之を行と謂い、其の清明なるよりして之を知と謂う。知行は一の思うの字に帰す。
（言志後録－28）

（意識） 心の役目は思うことである。思うことは、道を行うに当たって工夫を重ねることである。思えばそれについてますます精しく明らかにになり、ますます真面目に取り組むようになる。その真面目に取り組む面からみて「行」と言い、その精通する面からみて「知」と言う。したがって、「知」も「行」も結局は「思」の1字に帰着する。

（余説） 篤とくじつ実とつこうせいじつは篤厚誠実、つまり真面目です。この条は、陽明学（王陽明・1472~1529）の「知行合一」説の説明となっています。「知行合一」とは、「知」はすべて「行」を通して成立する。もしくは「行」を通してしか「知」は成立し得ないという論理です。これは朱子学の「先ず知を極めてこそ実践しうる」とする「知先後行」説を否定するものです。

佐藤一斎は、幕府を支える朱子学の学問所「昌平黉」の儒官でしたので、表向きは朱子学者でしたが、陽明学にも精しいことから「陽朱陰王」とも呼ばれました。

この「知行合一」の考えは、西郷どんの生涯を通じた重要な行動指針となりました。

27 晦かいに処る者は能くよく顯けんを見、顯よるに抛る者は晦を見ず。
（言志後録－64）

（意識） 暗い所にいる者は、明るい所をよく見ることができるが、明るい所にいる者は、暗い所をみることはできない。

（余説） 晦かいは月の最終日「みそか・つごもり」で「月隠」の略です。「顯けん」は「はっきりと見える」という意味があり、「明るい」に通じます。本文は、地位が上にある人への戒めとして「下からは上はよく見えるが、上からは下は見えない」とも、貧富が異なる場合の戒めとも取れます。

（参考） 菜根譚前集 32「卑ひくきに居りてしか而る後に、高たかきに登るの危あやむ為るを知る。晦くきに処りて而る後に、明あきらるきに向かうの太だ露あらかわるるを知る。静を守りて而る後に、動を好むの勞ろうに過ぐるを知る。黙もくを養いて而る後に、言多そきの躁そう為るを知る。」（第90回・14年4月）

28 信しんを人ひとに取ること難かたし。人は口を信ぜずして躬みを信じ、躬みを信ぜずして心こころを信ぜず。是こゝを以て難かたし。
（言志録－148）

（意識） 人から信用を得ることは難しい。人は言葉を信用しないで、その人の行いを信ずる。いや本当は行いを信ぜずに心を信ずるものだ。（心を人に示すことは難しいから）、心を人に得ることは難しい。

（余説） 躬みは、キュウとも読み、「背かがを屈めた体」とか「自ら行うさま」という意味です。秋月種樹の[評]があります。斉彬公は、御庭番にした西郷が眼光炯々として人を射るを見て、凡人にあらずと抜擢して用いた。公が水戸なりあき斉昭（烈公・慶喜の実父）への書を封をせず西郷に預け、斉昭からの返書も同様だったと、信の篤さを紹介しています。

32 妄念もうねんを起こさざるは是れ敬けいにして、妄念まこと起こらざるは是れ誠まことなり。

(言志録－154)

(意識) 迷いの心を起こさないのが敬であり、迷いの心が起きないのが誠である。

(余説) 「敬」とは、「自分に対して慎み、他人に対して敬う」ことで、中国宋代の朱子学における中心課題の一つです。「朱子語類」に「学者の工夫、ただ居敬窮理きよけいきゆうりの二事のみうちにあり」(中には慎んで徳を積み、外には物事の道理や法則を求める)とあります。

さらにこの条は、前回の「23 閑想客感は、志の立たざるに由る。一志既に立ちなば、百邪退聴せん。」の趣旨に通じるところがあります。

言志録では、この「その一」に続いて次のように「敬六則」を述べています。

(参考) その二「敬よ能く妄念せつだんを截断す。昔人云う、敬は百邪に勝つと。百邪来るには、必ず妄念有りて之が先導を為す。」(言志録－155)

その三「一箇の敬きよたは許多の聡明を生ず。周公曰く、汝其れ敬して、百辟ひやくへきの亨きようを識り、亦其の不亨ふきようの有るを識れと。既に已に道破せり。」(言志録－156)

(百辟：諸侯、亨：上に賜る貢ぎ物、誠の有無を、敬の一字で聡明に区別せよ)

その四「敬すれば則ち心清明なり」(言志録－157)

その五「己ひやくせいを修いっむるに敬を以てして、以て人を安んじ、以て百姓を安んず。堯に是れ天心の流りゅう注なり。」(言志録－158) (自分を治めるのに敬をもってすれば、人々、ひいては天下の人民を安んずることができる。敬は天の意志が流れ込んだものである。)

その六「敬を錯り認めて一物と傲し、胸中に放在すること勿れ。但だに聡明を生ぜざるのみにならず、却って聡明を窒がん。即ち是れ累ななり。譬えば猶お肚中に塊有るがごとし。気血之れが為に渋滞じゅうたいして流れず。即ち是れ病なり。」(言志録－159)

(敬の扱いを誤ると、却って悪い結果を生ずるとの警告)

32 民の義よに因りて以て之を激し、民の欲げきに因りて以て之に趨おもむかしめば、則ち民其の生を忘れて其の死を致さん。是れ以て一戦すべし。(言志録－154)

(意識) 民衆が正義とするとところを察してこれを激励し、民衆がなそうと欲するところを知って、その方向に赴かせれば、(民衆は感激し、信頼して)自己の命をも忘れ、一死を以て難に当たる勢いを生ずるものである。こうなれば、一戦しても大丈夫だ。

(余説) この条は、「民心をよく得れば難しいことも成功する」という意味にも取れます。高齢化や人口減、隣国の問題など、多様な困難な事態が予想されるこれからの我が国の姿はどうあるべきか、国のリーダー達は深く考える必要があります。ただ、最近では、国民投票や選挙などについて「民主主義の限界」という論もあり、難しいところです。

秋月種樹あきづきたねたつの[評]では、「伏見の戦いにおいて兵数が3倍、兵器が優れ、食糧も十分の幕府軍が薩長軍に敗れたのは、南洲や木戸公等の策が、民が願う人の道や望むところに因ったことにある。」とあります。

NHKドラマでも、大久保が急いで作らせた「錦の御旗」が、伏見の戦いの場で薩長軍を力づけ幕府軍を恐れさせて戦況が逆転した場面がありました。

(参考) 藤原正彦「教養なき国民による民主主義ほど怖いものはない。」

(新潮新書・国家と教養)